

現代の国語・言語文化（近現代）

一
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

その夏、私は十七になったばかりだった。たしかに若かったが、若いことは愉快なことではなかった。私には七つ歳上の兄と四つ歳上の姉がいて、する価値のあること、大人の度肝を抜くようなこと、は、みんな彼らが先にやってしまったと思っていた。残っているのはじゃこじゃこのビスケットみたいなものばかりだ、と。

じゃこじゃこのビスケット、は母の考えた言いまわしで、削ったココナッツだの砕いたアーモンドだの、干した果物のかけらだのが入ったビスケットのことだ。舌触りが悪く、混乱した味がするので、我家の人間はみんな嫌っていた。到来物の詰合せのなかで、だからそれらは最後まで残る。

父は大学の教員をしていた。母はどこにも勤めていなかったが、洋裁が得意で、ときどき頼まれて内職のようなことをしていた。階段の踊り場に置かれたミシンと、様々な色柄の布。

私は都心にある女子校に通っていた。体育の授業に薙刀なぎなたのある、古くさくも美しい学校だった。私が十七になったその夏、兄も姉もすでに家にはいなかった。人生を外へ外へカイクしようとする、たくましい子供たちだったのだ。現在二兄の父となって喫茶店を経営している兄は、当時定職についておらず、アルバイトをしながら放浪し、家には寄りつかなかった。のちに歯医者となる姉は、北海道で大学生活を送っていた。そこで知りあった男と結婚し、いまでも北海道で暮らしている。

問題児だった兄や優等生だった姉と違って、私は退屈な娘だった。

家の中には、両親と私の他に、シナがいた。シナはメスのスコッチテリアで、齒槽膿漏しそくのうろうの上に慢性の耳炎に悩まされており、口も耳もひどく臭った。十五歳のシナは、よぼよぼだった。兄と姉に置いてきぼりにされた、という点で、私はシナと自分を同類だ

と思っていた。

二階に上がったすぐ左側が私の部屋で、そこには本やレコードや安物の化粧品や、その年頃の娘の部屋にありそうなものがすべてあった。壁にはドライフラワーまでぶらさげてあった。

⑤「頭の悪い女の子の部屋ね」

姉に、よくそう言われたものだ。

私は十七年間おなじ町に住んでいた。東京のはずれの、私鉄電車の走る小さな町で、都会でも田園でもなく、年を追うごとに人口だけが過密になっていく類の、駅前だけが繁華でその奥は住宅と田畑、という場所だった。いまはない、緑色の鈍行列車⑥がまだ走っていて、それはAと揺れる上に、車内が油臭い列車だった。

蒸し暑い夏だった。

河村寛人⑦は精肉店の息子で、小学校のときの同級生だった。高校には進学せず、父親の店を手伝っていた。身体⑧つきのBした男の子で、男女別々に遊ぶのが普通だった小学生のころから、男女を問わず気持ちよく接してくれる、めずらしい存在だった。目のふちに小さな傷があり、それは「遊びに来た従兄⑨が本物の手裏剣を持っていて、それをぶつけられてできた傷」なのだ、と、誰かに訊かれるたびに⑦ティネイに説明する少年だった。

「ねえ、どこかに行こうよ」

午後遅く、商店街の一角で彼の揚げるコロッケを買い、その場でかじりながら私は言った。

「仕事がお休みの日っていつなの？」

コロッケは熱く、黄色い紙の袋にCと油がしみてくる。

「構わないけど、どこに行くの？」

顔じゅうに汗の玉をくつつけて、寛人はこたえた。長い、先の黒くなった菜箸^{さいばし}で、大きな鍋の中のクロツケを泳がせている。

「ドライブがいい。お父さんの車、借りられるんでしょう？」^⑧

私と同じ年の寛人は、無論運転免許を持っていなかった。それでもときどき店の車を運転していたし、お酒の好きなお父さんに呼ばれて、バーから家まで代りに運転して帰ることがあるのを近所の誰もが知っていた。

「無理だよ。免許のある人と一緒でなきゃ」

「平気よ。アクセルを踏めば自動的に動いて、ブレーキを踏めば自動的に止るんでしょ、車なんて。寛人はいつも乗ってるじゃないの」

車のことなど知りもしないのに、私はそう言って彼をたきつけた。

「助手席で地図を見る役をしてあげるから」

どういう理由によるものかはわからないのだが、私は河村寛人に対してだけ、強気の物言いできた。

中学校を卒業して以来、私はときどき精肉店に遊びに行った。といっても、クロツケを揚げる鍋や肉のなんだシヨウケースをはさんで、こんなふうに話すだけなのだが。

^⑨ 私の住んでいた家は駅の南側にあり、寛人の働いている店は北側にあった。それで、彼に会うにはいつも踏切りを渡った。
[D]とけたたましい音のする踏切り。すぐそばに鰻屋^{うなぎ}があつて、踏切りの周辺は、鰻を焼くけむりと匂いがたちこめていた。

家の中で、私は家族にブウちゃんと呼ばれていた。
[E]した赤ん坊だったから、というのがその理由だ。いま思えばあまり有難くない呼び名だが、ずっとそう呼ばれていたせいであまりにも自然で、私自身には^⑩テイコウはなかった。また、我家ではブドウのこともブウちゃんと呼びならわしており、私はブドウを何か親しいもののように思っていた。誰かに手紙を書けば、署名のあとにブドウの絵をかいた。自分のトレードマークか何かみたいに。

ベッドカヴァーは小さなブドウの散った柄（母の手製）だったし、父とデパートに行ってみつけた、ブドウの絵のついた素焼きのマグカップは、いまでも使っているくらいだ。

ブウちゃんと呼ばれていた当時の私の愛読書は、何といっても「ジャングルブック」^⑪だった。ずっと枕元に置いていて、寝る前に手にとって拾い読みをするか、手にとらないまでも目の隅で必ず表紙を眺めた。

⑪ そんなふうだったので、女子校の友人たちは、私の目に、一様に大人びて映った。大人びて活発に、女っぽく進歩的に。

彼女たちのうちの何人かは、大学生とつきあっていた。本格的につきあっていない場合でも、図書館やそのそばの公園や、カフェや、当時流行していたサーフショップなどで顔見知りになり、会えば話す程度の人脈はつくっていた。

私にはそういう人脈も、ましてや恋人もなかった。

とはいえ、ときどき彼女たちに誘われて、^⑫ そういう集りに顔をだすことはあった。素人くさいバンドのライブをみに行ったり、数学を教えてもらうという名目でグループで図書館に行ったり、放課後の街でマイタイという名前の不味^{まず}いカクテルをのんだりした。

そういう交友関係の中で、可愛^{かわ}いとか恰好^{かっこう}いいとか、気が合うとか話が合うとかいうことになればまあつまり「万歳」なのだった。

ドライブに行かれる、ということが、彼女たちが大学生とつきあいたがる理由の一つだったので、相手はお金持ちの学生でなくてはならなかった。小さな毛糸のキャップをかぶっていたり、外国製のシャツを着ていたりする男の子たちだ。彼らは例外なく親切で頭が悪く見えた。ファストフード屋ではなくアルコールをだすカフェを好んだが、酒に強くはなかった。テニスよりゴルフが、水泳よりスキーが、得意であるらしかった。そして、例外なく家族の仲がよかった。

「真由美^{まゆみ}ちゃんって、趣味は何なの？」

男の子たちはよく質問をした。音楽はどういうものを聴くの？ 休みの日は何してるの？ どの質問にも、私ははかばかしいこたえを返せなかった。べつに、とか、何でも聴くよ、とか、何かなあ、とか。そして、私には、自分に話しかけたことを相手が後

悔していることがわかり、ますますいたたまれなくなるのだった。

じゃこじゃこのビスケット。

彼らといるときも、私はしばしばそう思ったものだ。

(江國香織「じゃこじゃこのビスケット」による)

(注1) スコッチテリアⅡスコットランド原産のテリア犬。

(注2) ジャングルブックⅡ英国の作家ラドヤード・キップリングの短編小説集。

〔問一〕問七については、マークシートの所定の欄に記入しなさい。問八～問十については、記述式解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〕

問一 ☐ A B C D Eに入る最も適切なことばをそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二度以上選ばないこと。)

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|-------|---|------|
| 1 | かんかん | 2 | がつしり | 3 | ガタゴト | 4 | ぼっちゃり | 5 | てんでん |
|---|------|---|------|---|------|---|-------|---|------|

問二 傍線④「私は退屈な娘だった」とあるが、このときの私の、兄や姉に対する心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 子どもの頃優秀だった兄や姉に対する引け目
- 2 力強く生きている兄や姉に対する劣等感
- 3 家から出ている姉や兄に対する焦燥感
- 4 素行は悪かったが成功した姉や兄に対する負い目

問三 傍線⑤「頭の悪い女の子の部屋のね」とあるが、このときの姉の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 安価なものばかりで高価なものを買うことのできない私を冷やかしている。
- 2 化粧をしたり音楽をきいたりしていて勉強をしない私を皮肉っている。
- 3 年齢相応ではなく少し大人っぽい趣味を持っている私をからかっている。
- 4 周囲に合わせてばかりで自分らしさがない私を小馬鹿にしている。

問四 傍線⑧「ドライブがいい」と私が言うのはなぜか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 私と同じ学校の友人たちはドライブに行きたいと思っており、その影響を受けているから。
- 2 私は以前から自動車に興味を持っていて、いつか運転をしてみたいと思っているから。
- 3 寛人がときどき父親の車を運転していることは近所で有名で、それを私は知っているから。
- 4 寛人は普段から父親の車を運転しているので、休日にも容易に車を借りることができるから。

問五 傍線⑨「私の住んでいた家は駅の南側にあり、寛人の働いている店は北側にあった。それで、彼に会うにはいつも踏切りを

渡った」とあるがこれは何を暗示しているか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 私が寛人のいる精肉店に行くことの危険性
- 2 私が寛人に会いに行くことのわずらわしさ
- 3 私と寛人の間で芽生えている恋愛的な感情
- 4 私と寛人の間に横たわっている生活環境の差

問六 傍線⑪「そんなふうだった」とはどういうことか、その説明として適当でないものを次の中から一つ選び、その番号をマ

ークしなさい。

- 1 私が周囲と比べて子供っぽい趣味を持っていること
- 2 私が大学生と人脈をつくって遊んでいること
- 3 私が父親と一緒に買い物に出かけていること
- 4 私が同級生の男の子と会っていること

問七 傍線⑬「はかばかしい」の意味として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 大学生に自分を分かってもらえる
- 2 大学生と分かりやすく会話をする
- 3 大学生との会話を弾むようにする
- 4 大学生にあいまいな態度をとる

問八 傍線①「じゃこじゃこのビスケットみたいなもの」と反対の意味を表すことばを本文中から二十五字以内で抜き出し、その初めの五字を書きなさい。(句読点・符号も字数と数える。)

問九 傍線⑫「そういう集り」とはどのようなものか、本文中から一文で抜き出し、その初めの五字を書きなさい。(句読点・符号も字数と数える。)

問十 傍線②③⑥⑦⑩のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。文字は大きく鮮明に書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

電子メールが普及し、名刺にも電子メールのアドレスを印刷している人が多くなって久しい。電子メールは連絡手段としてジョウタイ化したといつてよいだろう。最近はそのような人はあまりいないだろうが、電子メールを使い始めた頃は、「ハイケイ」からメールを始める人がいたと記憶する。これは、手紙を電子的に送っているという感覚だろう。このような時期においては、電子メールは一般的な「書きことば」にハウセツされていたといえよう。

現在では、^④電子メールやSNSのことばは、「話しことば」に接近しているといつてよい。両者とは異なる言語態とみて、「打ちことば」という呼称もある。

「打ちことば」は新語に強いことをうたう『三省堂国語辞典』の最新版である第七版（二〇一四年一月十日刊）にもまだ見出しとして採用されていない。『岩波国語辞典』第八版にも『新明解国語辞典』の第八版にも『明鏡国語辞典』の第三版にも見出しとして採用されていない。デジタル『大辞泉』は「打ちことば」を「（「話し言葉」「書き言葉」に対して）携帯電話やパソコンのキーを使って（打って）書かれた語句・語法。また、その文章。^⑤メールに使われる絵文字・顔文字や「アケオメ（明けましておめでとう）」などの略語による簡略化した表現や、漢字を多用するなどの特徴があるとされる」と説明している。

「絵文字」や「顔文字」は「打ちことば」における「言語外情報」のようなもので、こうした点は「話しことば」的にみえる。パソコンを使ってキーボードを「打つ」場合と携帯電話やスマートフォンを使って「打つ」場合とでは、「打つ」環境が異なる。スマートフォンにおいては、「トグル入力」ではなく「フリック入力」^②がされることが多く、そもそも「打っていない」ことが多い。「打ちことば」の発生によって、「書きことば」は「話しことば」側にひっぱられているようにみえる。少し前であれば、「ひっぱられることがある」と表現しただろうが、現在では確実にひっぱられているといつてよい。特に「書きことば」^⑥の特徴であった「構造」という点においてそれが顕著にみえる。^⑦

なお、筆者は、原稿や論文をパソコンで作っているが、パソコンの場合、結局は何らかの「辞書（ソフト）」によって文書を作成している。その「辞書（ソフト）」は携帯電話やスマートフォンよりもしつかりしていることが多いはずだ。また、打つための道具ともいえるキーボードも物理的にしつかりとしている。そうしたことを考え併せると、「打ちことば」の内部にさらにいくつかのカテゴリーを設定することもできそうだが、ここでは「打ちことば」というカテゴリーで述べていくことにする。

携帯電話やスマートフォンで電子メールを作成する場合、電子メールではあっても、特定の相手にそのメールを出す場合が多い。そうすると、「手紙」や「はがき」にちかくなってくる。ここでは「手紙」と「はがき」を特に区別せずに、「手紙」にハウセツして述べていく。

「手紙」は非常に特徴のある「文書」といってよい。特定の「読み手」を想定して作られる文書で、その「読み手」は一人であることが多く、かつ「書き手」と親しいことが少なくない。「書き手」と親しいことは、「書き手」と多くの「情報」を[A]しているはずで、わざわざ言語化しなくてよい「情報」が少なくない。そうした言語化されていない「情報」を背後に置いて、この手紙で伝えなければならないことに極度に特化されたことがらが文字化されている。それゆえ、「読み手」以外の人には、そこに書かれている「情報」がどういふことなのか分からない、ということがしばしば起こる。

正倉院に残されている仮名文書がある。二通あるので、甲、乙と呼ばれているが、この仮名文書は[B]わからない理由は、現在イメージするような「書きことば」がまだできあがっていないためということも当然あるが、やはりそこで何が言語化されていて、何が言語化されていないか、ということが現在の「読み手」にはつかみにくい、ということがあると考える。あるいは明治時代に書かれたはがきを読むと、これまたわかりにくい。同じ「書き手」が同じ相手にだしたものを何通か読むと、だんだんわかってくる。何通か読んでいるうちに、あるはがきにおいては言語化されていなかった「情報」が他のはがきを読むことでつかめるということがあるからだ。それでもわかりにくいことがある。

これと同じように、特定の相手を想定して「打った」メールは相手が想定されているだけに、「情報」が極端に限定されやすい。これは特定の人の間でかわされる「話しことば」にちかい。そういう「想定」のもとに「打って」いるから、「書き手」の気分

もそういう気分になっている。ある程度の人数を「聞き手」として想定している「話しことば」よりもさらに限定されていることもある。

しばしばメールを交換している人同士では、お互いのメールアドレスが登録してある。またメールアドレスを見慣れているから、メールに名前が書いてなくても誰からのメールかわかる。来たメールに返信をする場合も、同様だ。こうしたことに慣れてしまうと、メールに自分の名前を書き忘れるということも起こる。メールに自分の名前を書かないということを手紙でいえば、名前を書き忘れて手紙を投函^{とうかん}するということだ。手紙の場合は、字と内容とが手がかりになるが、よほど親しい相手からのものでなければ、誰からのものかわからないかもしれない。名前の書き忘れを防ぐために、メールの最初に、相手の名前と自分の名前を必ず書くようにしている。名前が書かれていないメールが来ることもある。これは「打ちことば」に慣れてしまったために起こる現象といえてよい。

(今野真二『うつりゆく日本語をよむ―ことばが壊れる前に』による)

(注1) トグル入力⇨キーを押した回数によって割り当てられた文字が選択できる入力方式。例えば、「あ」のキーを三回押すと「う」が、「か」を二回押すと「き」が入力されるような入力方式。

(注2) フリック入力⇨キーにタッチした後、上下左右に滑らせることで文字が選択できる入力方式。例えば、「あ」のキーにタッチすると左に「い」、上に「う」、右に「え」、下に「お」が表示され、その方向に指を滑らせることでその文字が入力されるような入力方式。

〔問一〕問五については、マークシートの所定の欄に記入しなさい。問六～問九については、記述式解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〕

問一 ☐ Aに入る最も適当な語を次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | |
|------|------|------|------|
| 1 共感 | 2 共通 | 3 共同 | 4 共有 |
|------|------|------|------|

問二 ☐ Bに入る最も適当なことばを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 内容はわかっていて。しかし、その漢字の読み方がよくわからない。
- 2 話しことばとしては読んでいる。しかし、書きことばとしてはよくわからない。
- 3 文字としては読んでいる。しかし、内容がよくわからない。
- 4 文字もわからないし、内容もよくわからない。

問三 傍線④「電子メールやSNSのことばは、「話しことば」に接近している」とあるが、「話しことば」に接近していないと考えられるものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 漢字を多用する
- 2 自分の名前を明らかにしない
- 3 情報が極端に限定されている
- 4 略語による簡略化した表現が使われる

問四 傍線⑨「打ちことば」の内部にさらにいくつかのカテゴリーを設定することもできそうだ」とあるが、例えばどのような

カテゴリーが考えられるか、適当でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 絵文字や顔文字を使うか使わないかといった、世代によるカテゴリー分け
- 2 トグル入力するかフリック入力するかといった、入力方法によるカテゴリー分け
- 3 パソコンとスマートフォンのどちらを使うかといった、デバイスの違いによるカテゴリー分け
- 4 メールで伝えるか、SNSに投稿するかといった、媒体の違いによるカテゴリー分け

問五 傍線⑩「書き手」の気分もそういう気分になっている」とあるが、そういう気分とはどのようなことを想定しているか、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 ある程度の人数の読み手を対象としているから、詳細に書かなくてもわかってくれるだろうという想定
- 2 ある程度の人数の読み手を対象としているから、詳細に書かなければわかってくれないだろうという想定
- 3 特定の読み手を対象としているから、詳細に書かなくてもわかってくれるだろうという想定
- 4 特定の読み手を対象としているから、詳細に書かなければわかってくれないだろうという想定

問六 傍線⑤「メールに使われる絵文字・顔文字」とあるが、何を補うためにメールでは絵文字や顔文字が使われるのですか。本文中から十五字以内で抜き出して書きなさい。（句読点・符号も字数と数える。）

問七 傍線⑥「書きことば」の特徴」とあるが、「書きことば」の特徴がよく現れていると思われる文書を本文中から漢字二字で抜き出して書きなさい。

問八 傍線⑩「そこに書かれている「情報」がどういふことなのかわからない」とあるが、ここで用いられている「情報」とは

ほぼ同じ意味の語を漢字二字で本文中から抜き出して書きなさい。

問九 傍線①②③⑦⑧のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。文字は大きく鮮明に書きなさい。